

# 乳幼児突然死症候群 (SIDS) 発症の背景と しての育児習慣に関するアンケート調査 (分担研究：乳幼児突然死症候群に関する研究)

1) 吉永宗義, 2) 福井ステファニー

要約：乳幼児突然死症候群 (SIDS) の発症に関係すると考えられる育児習慣に関わるリスク因子についてのアンケート調査およびその追跡調査を行ない、SIDSの頻度の高いニュージーランドの報告と比較した。その結果、本邦においてはリスクとされる妊娠中の喫煙率、うつぶせ寝の頻度が低く、反面リスクを減少させると考えられる母乳栄養率は比較的高いことを示した。また、就寝時添い寝をしている割合が高いことや、着衣にウールを使用している頻度が低いこと、着衣はしっかりくるまず手足の動きを自由にする様になっていることなどの点で相違がみられた。

見出し語：乳幼児突然死症候群, SIDS, 育児環境, 母乳栄養, 喫煙, 添い寝, 腹臥位

【緒言】乳幼児突然死症候群 (以下SIDS) の発症に関わるリスク因子については、多くの報告があり、ニュージーランド、オーストラリア、オランダなどではこれらのリスク因子を除くようにキャンペーンを行ない発症頻度を減少させるなどの効果をあげている。本邦は従来上記の各国に倉へて発症頻度が少なかったが、これは育児習慣の違いによるものも一因であると考えられる。昨年度我々は、ニュージーランドのグループが作成した育児習慣に関する調査用紙を日本人用に改変して、本邦における育児習慣の状況について検討した。その結果、リスク因子として注目されている母親の喫煙率や腹臥位就寝の頻度は少ないことがわかった。又、母乳栄養率も比較的高いこともわかった。本年度は、対象例を増やすとともに、寝具や着衣の状況についても検討し、更に出生1年後の追跡アンケートも行なったので報告する。

【対象と方法】昨年度同様、全国で6分娩施設で分娩した母親を対象に出生1ヵ月時の育児方法に関するアンケート調査を行ない、更にこれらの対象例に対して生後1年後に追跡アンケートを行なった。生後1ヵ月時のアンケート調査は昨年度同様のものを用い、このアンケート調査の原本を作成したニュージーランドのTaylorらの報

告と比較した。また、追跡アンケートでは、一年間の児の疾病罹患状況、母乳栄養の状況、喫煙の状況について質問を行ない、最後に育児に対する母親の不安などについても意見を求めた。

【結果】アンケート調査は全部で604例を回収した。このうち住所の記載のあった513例については追跡アンケートも行なった。追跡アンケートは、住所が不明で返送された者5例を除いた508例中358例で回収し、回収率は70.5%であった。

図1には、1ヵ月時の栄養方法を示した。今回症例数を増やした結果でも、昨年度報告したと同様に、完全母乳栄養率は約40%であり、母乳中心の混合栄養を含めると約75%で母乳栄養が積極的に行なわれていた。しかし、図2に見られるように、母乳栄養率は施設によってかなりバラツキが見られ、母乳栄養率の低い施設での栄養指導を適切に行なうことによって、より母乳栄養率を上げることが可能になると思われる。

寝具、寝かせ方、着衣の状況などについては、アンケート調査用紙を作製したニュージーランドのTaylorらの報告内容と比較するといくつかの異なった状況が見られた。即ち、寝かせ方では、図3に示したように昨年の報

1) 国立長崎中央病院小児科 : Division of Pediatrics, Nagasaki Cyuo National Hospital

2) 国際SIDS連盟日本代表 : Executive director, SIDS family association in Japan

告同様、約70%が仰臥位で就寝し、腹臥位就寝（うつぶせ寝）は少なかったのに対し、Taylorらの報告では41.8%が腹臥位で就寝しており、明らかな差が見られた。しかし、我々の対象例でも、図4に示したように分娩施設によって就寝方法にはバラツキが見られ、施設による指導方法などが寝かせ方に影響を与えているものと考えられた。図5には就寝時の寝具の状況を示したが、就寝時に親が添い寝をする割合は、Taylorらの2.3%に対して、我々の場合は約25%で行なわれた。その他の相違点としては、Taylorらの報告では着衣にウールを用いる割合や、児をしっかりとするんで寝かしている割合が多かった点があげられた。図6は、母親が寒いと感じた時に、児を暖めるのにどのような工夫をするかについて聞いたものである。今回の調査では部屋の暖房で調節すると答えたものが多く、寝具着衣を増やして暖めるといった例の方が少なかった。

母親の喫煙状況は図7に示したように、昨年度の報告同様95%以上で喫煙しておらず、20本以上の喫煙例も非常に少なかった。

追跡アンケート調査に協力した358例全てで、死亡例はなく、ALTEに陥った症例や無呼吸発作がみられた例もなかった。これらの対象例の罹患状況を図8に示した。病気をしなかったと回答した者は33.1%であり、60.1%が軽度の病気にはなつたが元気になっているという例で、残りの約7%が入院するほどの病気に罹患していた。病気をしたと答えた例のほとんどが感冒に罹患した者であり、その他ではアトピー性皮膚炎、肺炎気管支炎などの下気道炎が多く見られた。

図9には、乳時期の栄養方法に関する追跡調査の結果を示した。調査時点まで完全母乳栄養と答えた症例が約40%で、完全母乳栄養であったが途中から混合栄養となった症例が34%、最初から混合栄養であった症例が25%であり、全く母乳を与えていなかった例は6.4%にすぎなかった。母乳栄養から混合栄養へ移行した例は、平均4.4ヵ月目に移行しており、完全母乳を調査時点まで継続しているものを含めると、約70%の例で4ヵ月半までは母乳栄養が行なわれていることになる。

図10は母親の喫煙状況の追跡調査の結果を示したものである。1ヵ月時点での喫煙率は5%未満と低かったが、追跡調査時点での喫煙率は13.8%へと上昇していた。これは、出産前後では禁煙していたものの、出産御ある程度の時期をへて再度喫煙を再開した例がいたからである。

しかし、喫煙の再開時期は出産後5.3±4.1ヵ月であり、SIDSの発症が多い4ヵ月以前には少なかった。

【考察】今回のアンケート調査では、昨年の報告に対象数を増やし、さらにその後の育児状況に関する追跡調査も行なった。喫煙状況、栄養方法、就寝時の体位に関しては昨年の報告同様の結果を得た。母親の喫煙の割合は低く、再喫煙するものも、SIDSの発症が多い4ヵ月までには少なかった。栄養方法では、母乳栄養率が比較的高かったとはいえ、施設間の差でもみられるように、より適切な母乳育児指導が行なわれることによって、さらに向上させることができると思われた。

その他育児状況については、Taylorらの報告との統計学的比較はできなかったが、就寝時の状況でいくつかの相違点がみられた。まず、就寝時の姿勢について、我々の調査では70%以上が仰臥位であったが、Taylorらの報告では41.8%が腹臥位であった。しかし、Taylorらの報告は1989年のものであり、その後腹臥位をしないようにするキャンペーンで、腹臥位の割合は減少してきている。その他の相違点としては、添い寝をする割合である。添い寝に関しては、母子間のarousal responseを同期させる点で有効な就寝方法であるといわれる反面、従来より母親が児を窒息させるのではないかとという危惧がもたれたり、暖めすぎることにつながるのではないかとという意見もみられ、一定の結論は得られていない。我々の結果では27.8%の例で、両親（特に母親）と一緒に布団で寝かされており、Taylorらの報告2.3%とは明らかに頻度に違いがみられた。就寝時の着衣の問題では、手足の自由を奪うようにしっかりとくるむことは本邦では4.1%と殆どみられず、Taylorらの67%とは明らかに違いがあった。腹臥位や、毛布の掛けすぎ、sheepskinの使用などは、rebreathingによるhypoxemiaを起し易いと考えられており、着衣によって固くくるまれずに顔の動きや体動が自由であることは、rebreathingを予防することにつながる可能性がある。また、ウールの毛布を使用する際、木綿のシーツを併用することによってrebreathingをある程度避けることができると考えられているが、我々の調査では木綿のシーツや掛け布団を利用しているものが多くみられた。

今回の調査では、従来いわれている栄養方法（母乳栄養）、母親の喫煙、腹臥位就寝については、本邦ではSIDSの頻度を少なくするような結果を示した。さらに着衣の問題や寝具の問題についても、SIDSの頻度の多いニ

ニュージーランドのTaylorらの育児習慣と比較してrebreathingを避けるような状況がみられた。これらは、SIDSを予防しようとして行なわれているものではなく、本邦の多くの母親が行なっている習慣であり、これらの習慣が結果的にSIDSの頻度を少なくしているのではないかと考えられる。現在、ニュージーランドのグループとの比較検討を行っており、また、SIDSでなくなった症例でも同様のアンケート調査を計画しており、今後SIDSに関係する因子が新たにでてくる可能性もあると考えている。

最後に、今回の追跡アンケートにおいて、母親に育児に関する不安についての意見を求めた中で、SIDSによって子供を失うのではないかと不安を感じている母親が3例あった。このような母親に対して、適切な育児指導を行なう上でも、SIDSに関係する育児習慣などのリスク因子の解明は急を要する課題であると思われた。

【文献】

E.A.S. Nelson and B.J. Taylor : Infant clothing, bedding and room heating in an area of high postneonatal mortality.  
Pediatric and Perinatal Epidemiology 1989, 3, 146-156.

図1. 1ヵ月健診時の栄養法 (N=592)

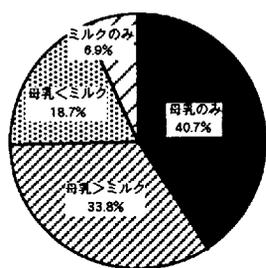


図2. 各分娩施設における栄養法の状況

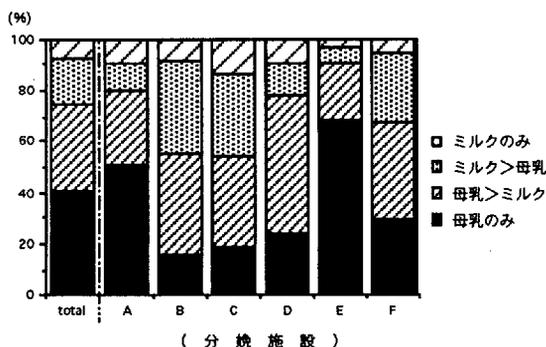


図3. 1ヵ月児の就寝時の姿勢 (N=591)

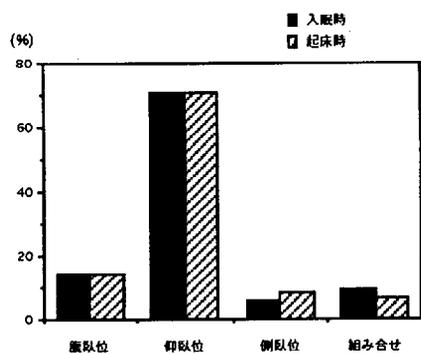


図4. 各分娩施設別にみた就寝時の姿勢

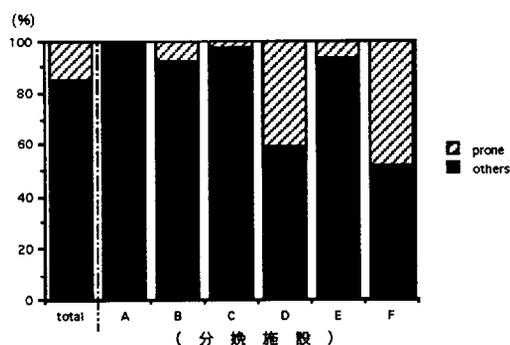


図5. 1ヵ月時に用いている寝具 (N=590)

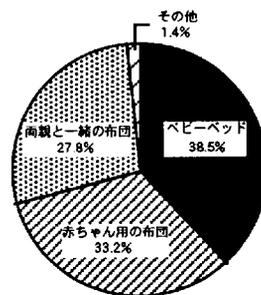


図6. 寒いときに赤ちゃんを暖かくするための対応 (n=585)

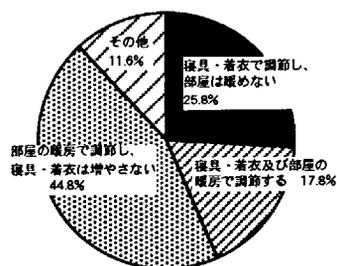


図7. 母親の喫煙状況 (N=529)

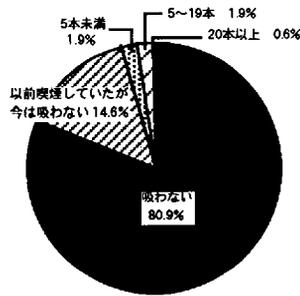
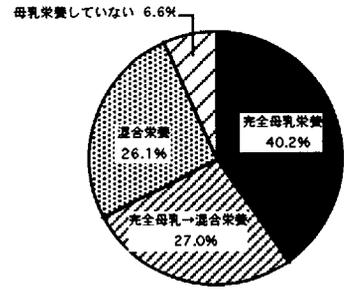


図9. 乳児期の栄養方法 (N=348)



完全母乳栄養のみの場合の期間: 10.7±1.8ヵ月

完全母乳→混合栄養の期間: 4.4±2.7→9.3±2.5ヵ月

混合栄養のみの場合の期間: 5.5±3.8ヵ月

図8. 乳児期の罹患状況 (N=353)

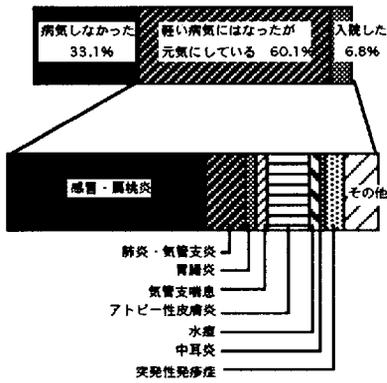
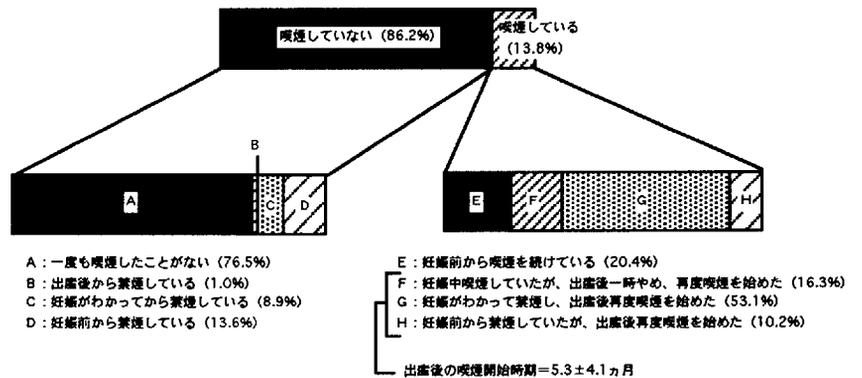


図10. 母親の喫煙状況 (N=354)





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳幼児突然死症候群(SIDS)の発症に関係すると考えられる育児習慣に関わるリスク因子についてのアンケート調査およびその追跡調査を行ない、SIDS の頻度の高いニュージーランドの報告と比較した。その結果、本邦においてはリスクとされる妊娠中の喫煙率、うつぶせ寝の頻度が低く、反面リスクを減少させると考えられる母乳栄養率は比較的高いことを示した。また、就寝時添い寝をしている割合が高いことや、着衣にウールを使用している頻度が低いこと、着衣はしっかりくるまず手足の動きを自由にする様になっていることなどの点で相違がみられた。